

知ってるようで知らない京都の史実 No.3

陸の孤島 清和天皇陵

* 京都市右京区嗟峨水尾清和 *

京都の最も著名な観光地の一つ《嵐山渡月橋》から西北西約8Kmにこの地名の場所があります。郵便番号は(616-8466)と、一見普通の場所のようですが、此処は何か自然災害が起こるとすぐ陸の孤島となる【危険区域】なのです。夜になるとタクシーですら、慣れた人でなければ断られる場所で、渡月橋から約3千円の距離です。勿論バスは通っていません。最寄の駅？はJRの保津峡です。最寄といっても3.5Kmあり、徒歩90分(曲りくねった坂道ばかり)余りと堂々と書かれています。右の写真は市内から水尾へ通じる唯一の道路の入り口、この先7Kmは殆どが坂道で幅は2m程すれ違いの場所は数える程しかありません。



此処の地名は現在は《みずお》ですが元は《みずのを》と一字多く呼称されていました。1字削減されたのは近年、多分郵便番号が制定された頃だと想像されます。この里は【柚子】の産地として著名で、現在此処の住人の多くが柚子の栽培で生計を立てているとの事、山の斜面の至る所に柚子畑が広がっています。この里からさらに1.8Km離れた所に《清和天皇陵》があります。

此処の住民の先祖はこの天皇をしたってここに住み着いたとか、その後子孫はこの天皇陵をお守りするためにずっとこの地に1000年以上も住み続けているのです。現在此処の住人は40世帯ほど、百数十名ですが、半数近くが《松尾姓》です。筆者も実は《松尾》で、幼少の頃父に連れられてこの水尾を訪ねた記憶があります。遠い親戚に当たる方が今もこの地に住んでいる可能性が充分ありそうです。

* 清和天皇のこと *

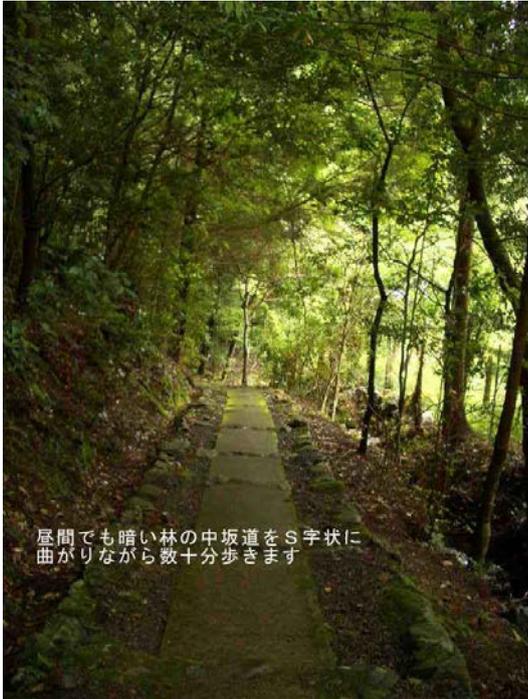
清和天皇は嘉祥3年(850年)文徳天皇の第4皇子として生まれ、臣下皇子の代表的な《清和源氏》始祖と崇められる天皇です。当時の最大の実力者《藤原良房》の娘明子(あきらけいこ)を母として嘉祥3年3月良房の館一条第での誕生です。文徳天皇は立太子を別に定めておられましたが、良房はこれを強引に廃嫡し、生後9ヶ月にして立太子になりました。

文徳天皇が逝去されると九歳で清和天皇の誕生ですが、藤原良房は人臣として初の《摂政》に就任します。以後貞観18年(876)退位までの12年間、良房は清和天皇に代わって全てを取り仕切ったに相違ありません。良房は兎も角、良房他界後の藤原基経

が権力を握って《摂政》の地位を離そうとしなかったのです。この状況に【嫌気】がさし、27歳で突如まだ9歳の貞明親王（陽成天皇）に譲位され、自らは上皇として仏門に入られます。

* 何故この地を終の棲家とされたのか *

清和天皇は誕生以来物心が付くまで、生母と共に祖父にあたる《藤原良房邸》で殆ど過ごしていたようです。何かにつけ、父君の文徳天皇より良房じいちゃんの方を頼りに



昼間でも暗い林の中坂道をS字状に曲がりながら数十分歩きます

するよう教育されていたのは当然でしょう。

藤原良房は嘉祥4年正二位に昇り、続いて斉衡四年（857）太政大臣を拝命します。この翌年に文徳天皇は崩御されるのです。清和天皇が即位されますが、僅か九歳、この結果良房じいちゃんが全てを取り仕切る《摂政》に就任するのは極自然の成り行きでした。

それに先立ち藤原良房には弘仁14年（823）嵯峨天皇の皇女潔姫が降嫁してきます。文徳天皇の皇后明子（あきらけいこ）の母親がお祖母ちゃんなのです。良房は嵯峨天皇に非常に気に入られ自分の娘を降嫁されているのです。父君文徳天皇は良房の様々な手回しのお陰で、実際には即位できる筈のない立場からだったようです。当初父君文徳天皇は第一皇子惟喬親王を立太子に指定され

ていたようですが、良房に遠慮し結論を先延ばしされていたのです。

しかし、世の中は平和＝平安ばかりが続く訳ありません。貞観8年（866年）に起きた応天門の変では、大納言伴善男を失脚させ、事件に連座した大伴氏、紀氏の勢力を宮中から駆逐するのに良房は成功します。この年の8月19日、清和天皇は良房に「摂行天下之政（天下の政（まつりごと＝政治）を摂行せしむ）」とする摂政宣下の詔を与えたことになっています。これが人臣最初の摂政なのです。時に清和天皇は16歳、この宣下は良房の自作自演であることは確定的でしょう。その6年後、貞観14年（872）信頼し切っていた良房じいちゃんは他界します。政ごとを自らやらねばと考えるに十分な年代に達しておられました。

然るに、そこに突如《藤原基経》叔父さんが現れます。「良房じいちゃんに変わり私が全てを代行させて頂きます…」となるのです。このため【やる気】を全く失くされたのでしょうか。その後27歳で突如退位され、余生を山中における仏教修行につき込まれるのです。陽成天皇に譲位後は、水尾に居住し、この地が気に入って、「ここを終



焉の地と定む」と遺詔を残されました。

聡明な方ほど【無常観】が強いのです。周囲の方々特に母親や祖父から、一生懸命に【世の平安】を神仏に祈る事、人々があつと驚くような和歌を詠む事が務めと教えられて成長されました。世の中がその様な事で上手く行く筈がないのを実感するにつれ、『自分のやっている事は一体何なのか…』と疑問を持ち始め、それが無常観に繋がって行くのでしょ

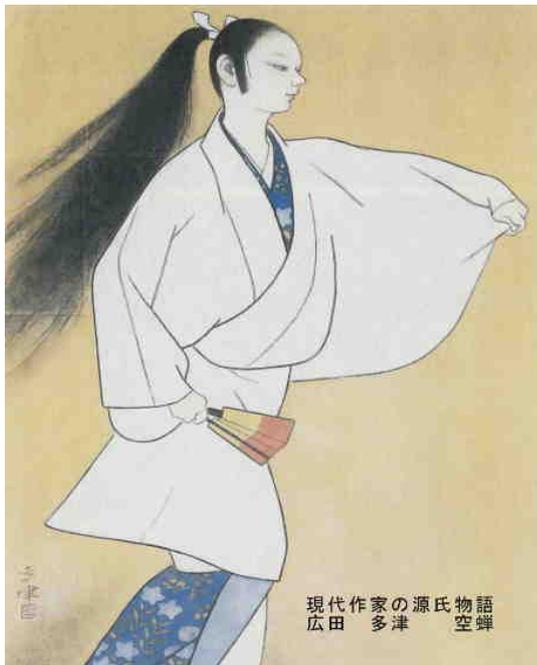
う。世の全ての事から逃れ、一筋に仏門に帰依なさるには【この地が最適…】と感じられたに違いありません。

* 良房の摂関政治と清和天皇と源氏物語の微妙な関係 *

清和天皇が良房に絶大な信頼を寄せられていた事には疑念の余地はありません。だが、藤原基経となると全く別の話になります。平安京は《桓武天皇》が定め、紆余曲折を経て《嵯峨天皇》で確立しました。

摂関政治は藤原道長によってほぼ完成されますが、この時代になって書かれた【源氏物語】は、当時の 50 年前の世の、この間の権力の微妙な移り変わりを虚構の物語として見事に顕しているとのことです。道長は才女の誉れが高かった《紫式部》を、態々宮中に任官させ、摂関政治が如何に優れているかを広く知らしめるためこれを書かせたのではないかとされているのです。次の小倉百人一首の歌を思い出してください。

たち別れ いなばの山の 峰にお生る まつとし聞かば 今帰り来む 中納言行平
ちはやふる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは 在原業平朝臣
この二人は、平城天皇の孫にあたり、異母兄弟で典型的な降下皇族です。しかも二人とも美男子として著名な【伊勢物語】の主人公にぴったりの人物です。清和天皇の生母



《明子皇后》は、在原業平と浮名を流したことで有名？で、長らく皇后とは認められなかった人物。しかも文徳天皇より 10 歳も年上です。この皇后が良房の実の娘なのです。源氏物語の主人公を思い出して下さい。微妙な関係とはこのことを指しているのです。何故業平が《伊勢物語》の主人公だといわれるのでしょうか。実は【光源氏】のモデルではないかといわれる【源融】は清和天皇より少し前にこの水尾の里に隠棲をしているようです。

この時代著名な何名かの人々が隠棲をしていた水尾の里を訪ねられ、いたくこの里がお気に召しました。このような状況下の清和天皇が【酒色】を好まれるのは当然です。高子（たかいこ）皇后の他に、藤原佳珠子、藤原多美子、嘉子女王、兼子女王、忠子女王、平寛子、源濟子、等等判明しているだけでも 15 名以上、これらの后妃との間に 20 名余りの皇子、皇女がおられます。

酒は当時《咀嚼発酵》が主体、京都松尾大社（酒の神様として著名）付近で作られて

いたようです。清和天皇が水尾にお移りになるなら、酒造りに携わっていた人達が共に移るのは自然だったでしょう。松尾姓がこの里に多いのはこれが原因だと筆者自身勝手に想像しています。

退位されてからは、東山栗田郷の円覚寺に出家され、近畿各地の仏道修行の旅に出て、最後に当時京都七大寺の一つであった水尾山寺に入られました。天皇は一生をここで終えたいと仰せになり、里人は此処に新しい仏堂を建て始めます。その間嗟峨の釈迦堂《清涼寺》に仮住まいされ、完成を待たれましたが、ご発病になりやむなく栗田郷の円覚寺に還り養生しますが、遂に崩御されます。

水尾の里人達はいたく悲しみ御霊を【清和天皇社】としてお祭りし、以後里の氏神様として崇めてきました。この里の愛宕山頂に建てられた【白雲寺】は、明治の廃仏毀釈令によって【愛宕神社】と改名され、現在でも火災を免れる神様として多くの参詣者にぎわっているようです。清和天皇陵は江戸時代に一度再建されたようですが、大正時代に本格的に再建され、現在にいたっています。

参考文献 日本歴史No.5 講談社
街道を行くNo.26 司馬遼太郎
逆説の日本史No.4 井沢元彦

(色染・昭35 松尾秀明)